

8月号 特別インタビュー

インタビュアー 谷藤悦史 ▶ 早稲田大学教授

財政均衡優先で社会保障費を切捨てるのは筋違いだ

—— 補助金のあり方を根本的に変えるマニフェストを出す ——

福田政権は受身の政治だ。最高権力者はこれではいけない。民主党は補助金のあり方を変え、配分のあり方も変えるマニフェストを出す。そして根本のところから考える政治、国のあり方を変えるために政権交代を実現したい。

この国会では妥協の効用も出てきた

谷藤 ねじれ国会を経験され、この状況をどのように捉えていますか。

藤井 私は民主党関係者に「ねじれ」という言葉を使ってはいけないと言っています。アメリカなどは過去26年中、18年ねじれています。両方同じ場合は統一政府と言い、今の形は分立政府です。それで、分立政府のほうが社会のためには良いと言う人が多いそうです。アメリカがイラク戦争を始めたときは統一政府でした。あの時分立政府だったら、あんな戦争に突入することはなかったという人が多いのです。

臨時国会で成立した26本の法律のうち、14本が政府立法で12本が議員立法でした。そこには妥協ができています。C型肝炎では、自民党は「絶対に国家の責任ではない」と言いました。われわれは「C型肝炎だけでなくあらゆるものを対象にしよう」という法案を出しました。そこでわれわれは「とにかくC型肝炎でやろう。次の段階であらゆるものを対象にしよう」と降りて、まとまりました。そのためにC型肝炎の和解が急速に進んでいます。もし自民党が国家の責任なしでがんばっていたら、まだもたついていたと思います。

被災者生活支援も、自民党は「公の金で被災者の私有財産に対応するのは絶対にダメ」と言っていました。民主党は「私有財産でも対応すべきで、500万円」という主張でした。結局自民党は私有財産に使うことを認め、民主党も300万円に下げました。妥協が相当進んだ面があり、現にこの通常国会でもやっています。

谷藤 私もねじれ国会を否定的には捉えていません。議論の広がりや新しい視点という点で肯定的です。政治学では「熟慮とか立ち止まる視点が重要である」と言われています。こうした点はねじれ国会の効用ですね。

藤井 妥協は国民生活に関連するものです。国の基本に関係するものは絶対妥協してはいけない。自民党と民主党では国の姿がどう違うかに関わります。軍配を上げるのは選挙における有権者です。

臨時国会で妥協しなかったのはテロ特措法です。われわれは「国連の正規の決議がなければならぬ」と妥協しませんでした。自民党は3分の2条項を使いました。国連決議なしで自衛隊は海外に出ていいのか、ダメなのかは国の基本に関わります。

今国会で道路特定財源の法律がありました。「ガソリンが安くなる」と捉えた向きもありますが、私はガソリンという言葉を一度も使いません。

これは54年前に、田中角栄さんが道路に集中投資するためにつくったものです。54年経った今でも道路に集中投資なのでしょうか。福祉も教育も重要で、国のあり方にかかわる問題でした。それなのに自民党は3分の2条項を使いました。民主党は、道路に集中投資してしかもその金が余るという事態を直そうと主張します。自民党は「やっぱり道路だ」というのです。これも選挙で有権者に軍配を上げていただく問題です。

谷藤 そうした基本的問題は伝わってきません。

藤井 最近のメディアは、それを書きません。

前任2人の修正が福田政治

谷藤 福田政権をどう捉えていますか。

藤井 小泉さんは市場原理主義者、安倍さんは偏ったナショナリストだと思います。福田さんは2人よりバランスが取れていると思います。

福田さんのマイナス面は、受身の人であるということです。一国の最高指導者が受身ではいけません。自分の考えを打ち出して、あらゆる手段で実現しようとし、それでダメならやめさせてくださいというのが最高指導者だ。

古今東西国民のためにいいことをした人には既得権者という敵がいました。それを敵にまわせないでは世のためになることはできない。

谷藤 確かに「受け」の政治ですね。小泉さん、安倍さんの残したことを修正する政治です。

藤井 そうです。地方財政調整や後期高齢者医療は小泉さんがやったことです。安倍さんに関しては、福田さんは国会で「戦後レジュームからの脱却についてどうお考えですか」との質問に「意味が分からない」と答えました。福田さんはそういう修正のやり方です。努力はしていますが実になっていません。

地方財政調整で独立税を地方に回すことはやりました。それは裕福な地方がより裕福になり、裕福でないところはそれに見合うプラスがありません。やるべきは地方交付税のほずなのに、交付税を切ったわけです。地方財政調整の角度を変えることが必要だったのに、福田さんは一旦取り上げた法人事業税を半分返させましたから、朝令暮改の典型です。

われわれは補助金を一括交付し、人口の少ないところ、GDPの低いところに多く交付しようというものです。地方財政調整の根幹です。

谷藤 修正にもデザインが必要です。結局三位一体の改革で、6兆円近いものが地方から取り上げられたのです。

藤井 それを分けたら東京や神奈川や愛知にいつてしまった。地方間格差が助長されたわけです。

すべては財政優先の便宜主義から出ている

谷藤 自民党も生活優先の政治を言い出しています。メディアが言うクリンチ作戦ですか…。この点をどう見えていますか。

藤井 例えば、後期高齢者医療の問題です。一つの保険を年齢で分けるのは保険の本質に反しています。財政優先の便宜主義です。国民健康保険には補助金が 5 割ついています。これを削減するために国民健康保険から 75 歳以上の老人をはずしてしまおうとしたわけです。

社会保障の節約から始まると、そこまでいってしまう。その後、所得の低い人を割り引くなど絆創膏を貼ることばかりやっている。

谷藤 自民党が生活優先を言い出しても、考え方が民主党と根本的に違うわけですね。

藤井 民主党と違うだけでなく、世の中の考え方と違う。発想の根本が財政優先 —— プライマリーバランス（財政収支均衡）から出ています。

参議院が与野党逆転した結果、さまざまな資料が出てきています。平成 18 年に天下りしている公益法人が約 4600、2 万 7000 人でした。そこに国から 12 兆 6000 億円のお金が出ていて、そのうち 5 兆 8000 億円は契約という形ですが、その 98% は随意契約です。残り 6 兆 8000 億円は交付金ないし補助金です。いわゆる持参金です。

この話をすると、自民党の良識派と謝野、加藤、津島さんもこの点に頑強に抵抗します。社会保障の削減ではなく、この削減ではないでしょうか。

特別会計も含め、国と地方で 500 兆円以上あります。そのうち削減の対象に考えてはいけないものを除いてもほぼ 200 兆円あります。このうち 1 割を削減できなかったら、企業経営から見たらあざ笑うのではないですか。

約 20 兆円は消費税換算で 8% 分です。ここから始めればいいものを、社会保障費 2200 億円から切るとするのは、ピントが外れている。

谷藤 財政改革や特別会計や中央と地方の配分などを聖域化して、社会保障費 2200 億円を削減するというのはまったくおかしい。

藤井 私が税制調査会の会長として、税財政は日本の国の資源配分の問題だから論理的でなければいけないと言いました。納税者が稼いだものをどれだけいただいているのか、それを公が何に使うのか、使うのは国なのか地方なのか、これをはっきりさせようと始めました。その結果、特別会計がいかにガンであるかという点がクローズアップされました。54 年間も道路特定財源が続いているのは、利権があるからとしか考えられません。

谷藤 問題は財政・税制フレームの問題です。この問題に触れないで増税派だとか経済成長派などといわれているのはおかしい。それと制度が見えにくく使いにくくなっていることが問題です。制度はシンプルにすることが肝要ではないですか。

藤井 自民党は今まで政権をとってききましたから、つぎはぎでしか説明ができなくなっている。原点が間違っていたといえば、今までの自民党はなんだったのかということになる。

私たちは原点を変えようとしています。「そんなことできるの」と言われますが、それが

できないなら政権交代などやめよう。同じようにつぎはぎするなら、政権交代の意味がないからです。

今は敵失を待つ我慢比べのとき

谷藤 どのくらいの時期に総選挙をやらざるを得ないとお考えですか。

藤井 これは総理の専権事項です。専権者である福田さんがまったくやりたくないわけですから、私は最後の最後まで引き伸ばすと思います。その前にやるとすれば民主党が何かボロを出したときか、自民党が特別良いことをやったとき。小泉さんはこのセンスはすごくありました。田中真紀子さんを辞めさせてドーンと人気落ちたら次は北朝鮮の問題で回復するなど、稀に見る勘の良さです。しかし、福田さんは良識的ですから、そういう勘は働かないだろう。

谷藤 世論状況から今選挙はできないでしょう。内閣支持率も少し上がっただけで、政党支持率も民主党のほうが高いとなると、敵失を待つか、ヒットを飛ばすか、まさに我慢比べでしょう。

藤井 福田さんではヒットは飛ばせないでしょうから、うちが味方失をやらなければ良いのです。我慢比べになることは国民にとっては何にもやらないということですから良くありません。

谷藤 経済に閉塞感があります。何も変わらない中で経済がジリジリ悪くなって物価が上がっていき、方向性が見えなくなっています。これは民主党も突破できないでいると思います。

藤井 経済は間違いなくマイナスに働いている。原油高騰の問題は避けられない。例えば、第一次オイルショックは、第四次中東戦争があって、主体となった国々が石油の値段を上げる仕組みになった。

今回の原油高騰は、産油国の力だけで上げているのではなく、考えられないような巨額の投機資金が動いているわけです。これを抑える難しさがある。G8などで「投機資金を抑えよう」と言っていますが、結局具体的な答えは出てきません。

根本的対策にはなりません。漁業で使う重油は助成するなどの申し入れを政府にしました。根本対策は投機資金の話です。第一次のときにイランやイラクに政府特使を出しましたが、今度は誰のところにいったらいいのかわかりません。

消費税はマニフェストに打ち出す

谷藤 民主党が政権交代を目指すのなら、今の世論状況よりももう一段レベルアップしていかなければならない。生活優先政治に加えて、自民党とは違う何かを明示していく必要がある。

藤井 それがマニフェスト（政権公約）です。次の選挙に向けたマニフェストは、今出て

いる問題だけではダメです。税制の問題では、公平・公正だけでなく納得の原則と透明性の原則が必要です。納得の原則で言うと、「選挙が終わったから消費税を上げる」などというのは最低であって、われわれは消費税については必ず選挙で出します。法律的にも会計的にも目的税として出します。目的の対象は年金の基礎的部分と高齢者医療です。高齢者医療対策は、後期高齢者保険ではなく、こちらで解決すると明確に出す方向になる。

国と地方の問題は非常に大事です。地方分権が日本の政治形態の基礎でなければならぬ。国民生活に直結する話は、地方の方がわかるからです。国がやると距離が遠くて隔靴搔痒（かっかそうよう・靴の上から足を搔く）の感があります。市長や市会議員のほうに分かっているはずで、国の仕事に限定する範囲を明記します。国防・外交・マクロ経済政策・基礎的社会保障等々です。

お金の問題については、補助金制度は中央集権の典型です。例えば、「保育所を作るのに何平米必要だ」なんてことは必要ありません。自由に使わせることです。分け方ですが、人口が少ないところほど厚く、GDPの低いところほどたくさんいくようにします。東京や神奈川、愛知への補助金は要りません。法人事業税があるのだから、それでちゃんとやってください。こうしたことを明確に出す。

地方交付税を国は自主財源といいます。それはウソです。細かいことをいろいろ言って配分するから、地方の自主財源にはなっていません。それも含めてマニフェストに出すつもりです。

谷藤 これについては福田政権の熱意が感じられないですね。平成の大合併、3300 あった基礎自治体が1800 ぐらいになったのですから、都道府県のあり方を大きく変えざるを得ないはずですが。都道府県のやるべきこと、市町村のやるべきことを再規定しなければならない。

藤井 地方自治体が半分になったわけですから、それは生かさないとはいけません。民主党は必ずしも道州制に賛成ではないとよく言われます。民主党としては、基礎自治体がしっかりすれば、相当できるはずで、広域的なことは、広域連合のようなものをつくってやればよい。都道府県をやめて道州を作ることは、同じことになりはしないかという心配があるわけです。

道州制を否定しているわけではありませんが、「都道府県をなくして道州に変えることが本当に必要なのか」、その結論が少しぼやけています。この点もマニフェストで出さなければいけない。

谷藤 先進諸国に比べて、日本は地方財政の規模が小さい。例えば、国が今80兆円の財政規模だとすれば、地方の財政規模は人口比例になっているのが先進国の動向です。東京都でも人口比例分までありません。

藤井 その通りです。「国の仕事はこれしかやらない」ということをはっきりさせることが重要だと思います。権限と財政は車の両輪です。

若い議員には政治の激しさがよく分かっていない

谷藤 藤井議員のライフワークをお聞かせいただけますか。

藤井 党内の1年生議員を中心に『私の思い出の政治家像』という話をしたことがあります。そこで二つの反応がありました。一つは若い女性議員から「今の話には少し装飾があるのでは…」というものでした。これには愕然としました。今の若い議員には、昔は良くも悪くもどれほど激しいことをしたかが分からないのです。

私が大蔵省に入った昭和30年に「質問を取る係」ということで時の鳩山一郎内閣を知った時のことです。鳩山総理は、吉田自由党系に「バカなことはやめろ」と言われながらも、「どうしても日・ソ共同宣言に行くのだ」とぼろぼろ涙を流していました。4年前に脳梗塞で倒れたにもかかわらず、鳩山総理も命懸けでしたね。

また、この「日・ソ共同宣言」に同行した河野一郎農林大臣も、会談に北方四島の話が全く出ないので「俺とフルシチョフ2人で会わせろ」と言ったところ、フルシチョフ第一書記は河野一郎氏が一滴も酒を飲めないことを知っていて、「俺の注いだ酒を全部飲んだら会ってやる」と言ったそうです。それで河野氏は注がれたコニャックをガブ飲みしてフルシチョフに会ったそうです。その時のことを後に河野洋平さんに聞いたら、あの時は「半分死んでいた」そうです。みんなで水風呂に浸けて揉んで生き返らせ、何とか「二島返還」を取り付けたのです。こういう話をしても今の若い議員には分からない。

もう一つの反応は、男性議員でしたが「昔の人は悪いこともやったが良いこともやった。今の人は悪いこともしないが良いこともしない」というものでした。正しい見方だと思います。

谷藤 政治家の方と話をしても、政治に対する熱情を感じません。皆さん大変スマートになって、政策のことも勉強するのですが、「これだけは実現したい、これだけは思い入れをもってやりたい」ということが感じられません。

藤井 私は田中角栄内閣の時の秘書官でしたから誉めにくいのですが、ある時総理に呼ばれて「谷川岳を潰そうと思っているのだが…」と言われたので「それは神への冒瀆ですよ」と答えたら「お前みたいな東京の野郎に雪の苦勞が分かるか」とすごく叱られたことがありました。ある時この話を新潟でしたところ、とある学者が「実際に僕は費用を計算しろと命じられました」と言われて驚いたことがあります（笑）

ブレジネフ時代にソ連へ行った時のことですが、ブレジネフ氏から数時間にわたって「シベリアがいかに良いところか」と話をされたのです。角栄さんは短気だから机をパンと叩いて「日本国民を代表して何しに来たか分かっているのか。北方四島だ」と言ったら、ブレジネフ氏は「ダー、ダー（そうだ）」と言いました。しかし、後にグロムイコ外務大臣と日本の外務省が話したときにこの話が出たのですが、グロムイコ外務大臣はこのやりとりを「ダー（そうだ）」と言ったのではなく、咳をしたのだと言ったそうです。それほど外交とは大変なのだという話を若い議員にしました。

二つの系譜を受け継いで政権交代を実現したい

谷藤 政権交代が実現させたい夢ですか。

藤井 それは私がなぜ自民党を離党したかに関係します。

田中角栄総理のとき官房長官だったのが後藤田正晴さんで、私は後藤田学校の最下級生でした。

ある日、後藤田さんのところへ行って「自民党を辞めようと思います」と言ったら、「良

いことだ」と言われました。続けて「だけど10年かかるぞ。我慢ができるか」とも言われました。私が「では一緒に自民党を出ませんか」と言ったら「俺も歳だ。10年先も生きているかどうか分からないから」と言われた。後藤田さんは権力主義者でしたが、勤の鋭い人でした。伊藤正義さん、後藤田さんは自民党内で尊敬した数少ない人です。あれから10年以上の時間がかかっていますが、政権交代はなんとしても実現したい夢です。

谷藤 イギリス政治でよく使われ、日本では使われない言葉に“実験”があります。政権交代は、今までとは違う政治の“実験”をすることだと思います。

藤井 先輩でもある大平正芳さんの話もよくするのですが、ご承知のように大平さんは無教会派のキリスト教徒で、読書家でもありました。大平さんが総理になるとき「あの人はキリスト教徒だから総理の資格なし」と愚かなことを言った人もいました。

大平さんは、八重洲ブックセンターの4階（思想・哲学・歴史書売り場）しか行きません。今の政治家には基礎的な本を読んでもらいたい。ろくな本を読んでいませんよ。基礎的な本をよく読んでいたのは、大平さんと前尾繁三郎さんでした。

谷藤 自分の党を捨てても新しい日本の政党政治を作ろうとした伊藤さんや後藤田さんの願い、主義主張の大切さを示した大平さんや前尾さんを受け継いでいるわけですね。

藤井 そうです。この二つの政治の系譜の上に政権交代への思いがあるのです。